

## 第七章 情愛恋慕

### 1

国鉄湧網（ゆうもう）線は現在では網走から中湧別まで走っているが、当時は網走から二つ目の卯原内（うばらない）までしか走っていなかった。

開通は昭和十年となる。

白岩由吉は常呂からさらに山奥に入り、知来（ちらい）の山中に身を隠した。

知来は湧網線で網走から現在では十番目の駅になる。秋田刑務所を破獄した時は、処遇問題を訴えるために東京・小菅刑務所に自首して出たが、今度は山中に踏み止どまる決意をした。

逮捕されると前にも増した苛酷な扱いを受けるだろうし、小塚看守からは「今度逃げたら、戦争中だからな、利敵行為になるお前は軍隊に渡して銃殺だ。それでなくとも一人すでに罪もない一国民を殺しているのだぞ、お前は」と恐れていた。

一年半にわたる拘禁の幸さが身にしみていた。小塚看守への復讐もあきらめた。

常呂郡佐呂間町知来は、網走市から直線距離にしてほぼ三十キロ、山また山の奥深

い地であつた。

北海道の屋根といわれる大雪山系の山裾野の一角にあたる。彼は、赤錆びた鉄色の山に行き当つた。鉾山であつた。

日支事變が始まつた頃から軍の要請もあつて、鉾石の試掘が行なわれた。

豊富な鉄鉾石があり、今では、近くに小屋掛けがされて、鉾石の採掘作業が連日続けられていた。

もちろん、彼は採掘現場は避けた。

深い山間の岩肌に、ニメートルほどの幅のある試掘穴を見つけた。岩盤質の壁なので崩れる心配はない。

あたりには草木が生い茂っていたので、隠れるには絶好の穴だつた。

だいいち、ここまでは里人も入つて来ないと思われた。いくつか試掘の穴はあつた。もう十数年前に放置されたものだつた。

山また山の、谷地に沿つた場所にその恰好の岩穴はあつた。奥行きもニメートル近くある。入口は狭く、中は天井なども深くえぐられていたので、住居性は抜群だつた。湿気がないのも助かつた。

この日から、彼は、これからの冬の季節に向けて、冬眠する熊のように、食糧集めに夢中になつた。

この洞窟から常呂港へは約二十キロ、下佐呂間へは十キロの絶好の地であつた。

しかも近くには釘田鉾業所の事務所、食糧倉庫などがあつたので、錠前破りの特技を生かして、味噌や漬物の類いまで盗み出

した。里には十数軒の農家があったが、彼はその場所には近寄らなかつた。

もつぱら脚力にものを言わせて夜になると、何十キロも歩き、常呂方面に出掛けた。白米六十キロ、澱粉五十キロ、白絞油一缶、鰯の味噌漬け一樽、身欠にしん五十束、その他魚の干物に酒まで仕入れた。

それから暇を見つけては、いたどりの葉を集め、乾燥して、代用たばこを作つた。

沢地に降りると身の丈一メートルほどの大きないたどりの群生している場所が、あちこちにあつた。

戦時中のことで、専売公社が北海道の胆振（いぶり）支庁に採取を依頼していたほどで、徳舜別（とくしゅんべつ）、壮瞥（そうべつ）、久保内（くぼない）、伊達、長流、登別、白老方面のいたどりの葉が良質のものとなされていた。

九月半ばの秋晴れの日のことであつた。彼は、沢地に降りて、いたどりの葉を採つていたら近くに人の気配を感じた。

伸び上るようになして見ると、いたどりの群生が揺れていた。白い、姐さんかぶりの日本手拭が見えた。女だった。

女が一人、いたどりの葉を採取している。胸がどきりとした。

彼はしばし息を止め、女の動向を窺つた。このまま去るべきかどうか、決断を迫られていたのだ。

向うはまだ彼には気付いていない。女が、眼の前にいるのだった。近付いて

はならない。そう言い聞かせているのだが、体の方は勝手に動いていた。

彼は腹這いになり、女が、わさわさといったどりの枝を揺さぶる音に合わせて、そろりそろりと地を這った。

十数メートル近くまで来た。

ちよろちよろと沢地に湧清水が流れていた。と、その時であった。急に女が作業の手を休めた。気付かれたのかも知れないと思ひ、彼は息を詰めた。

が、女は背負い籠を肩から外し、下においた。彼は眼を見張った。

彼の方に背を向けていた女は、モンペの縁に手を掛け、いきなり、白い尻を露出させ、その場にしゃがみ込んだ。

いたどりのひよろ長い、細い茎の間の向うで、白くて丸い、若い女の尻が剥き出しにされていた。

赤トンボがひよいひよいと彼の視野の先を掠めて行く。

女の足元も湿地で、わずかばかりの湧清水が浮き出ている。しゃーっと力強い奔りの音がした。湧清水を直接打っているので、水面がこれまた強く叩かれている。

とても健康的な音だった。

白くて丸い女の尻が、無邪気なかたちのままそこにおかれていた。

いきなり、彼は立上っていた。自分が脱獄囚であることなど忘れていた。もう、この世では手には入らない大事なものが、そこにはあるように思えた。

人の気配に驚ろき、女はさっと立上った。  
ちらと振り向いた。

あまりのことに、モンペに手は掛かっている。下半身はまだ剥き出しのままだった。  
「おい……」

次のことばが出て来ない。

女は、身動きできなくなっている。

もちろん声も上げなかった。一声掛けたら  
気を失なってしまうことだろう。

彼は、十数メートルの距離をもう詰めていた。女の首に彼は手を掛けた。

はじめて女は逃げようとしたが、途端に体から力が失くなった。

女は気を失なっていた。

彼は女の体を横抱えにし、さらに深い沢地の熊笹の茂みに女を連れ込んだ。自分の上衣を脱ぎ、その上に女の体をあお向けに倒した。女の瞼だけが、ぴくぴくと動いている。

口は半ば開けていた。

モンペは下げられたままだったので、女の剥き出しの下半身が限の前にあつた。

黒い陰毛が股間を隠している。陰阜（いんぷ）のあたりに一塊り、ぼあつとそそげ立っていた。毛深い女ではない。

それで不用意に開かれた股間に、はつきりと、一筋の条溝が印されていた。きつちりと閉ざされている。熊笹のすぐ下に水溜りがあった。彼は女の、姐さまかぶりの手拭いを取り、水溜りにひたした。

女の額にあてた。

まだ二十五、六歳、丸顔の色の白い女だっ

た。美人ではないが、半ば開かれた唇は少し肉厚で、男心を惹きつけた。頬を二つ三つ叩いた。ややあって女はうつすらと眼を開けた。虚ろな眼で眼の前の男を見た。

「おらは怪しいもんでねえつ、別に殺そうつでわけではねえんだから」

だが、女は彼の顔を眼の前にした時、「ひゃっ」となにか空気の抜けたような恐怖の叫びを發した。

「いいでばな、男と女だべ」

野良着の結びひもに手を掛けていた。その下のものを探った。乳房を掴み出した。驚掴みにした。彼は乳房を口に含んだ。

女はもう観念したようだった。

「：なんねえ」そのようなことを女は言ったようだった。彼には何も聞えてはいなかった。首筋のあたりに彼は唇を押し付けていた。うなじに押し当てたら「ふっつ」と女は大きな息を吐き、身をよじった。

慌てて、彼はズボンを脱いだ。

重い男の体が女の体の上に乗っていた。

女のモンペを足先から抜いた。「ふーっ」とまた女が息苦しそうな息を吐いた。

彼とて思いは同じだった。素っ裸の男と女が絡み合っていた。人肌のやさしさに包まれてしまうと、女もわれを忘れた。

そのように彼には思えた。

秋の陽光が、女の白い体をわななかせていた。体の隅々までの震えを、眩ゆい光が焙り出していた。

二人とも余裕がなかった。女は抱かれる

ことにすでに身を委ねているのに「わっ、わっ」と拒否する時のような声を出した。余裕のないままに、彼は、女の股間におけるものを分け入らせていた。

激しく腰を動かした。

彼のがっしりした肩先を女の両手が掘みとった。指先に力が入り、女の爪が彼の肩の肉に喰い込んできた。

なにか、この行為に、二人の激情がぶつかり合っている感じだった。

三分とは持たない。彼はおのれの激情を捨てた。熱いものが奔（ほとばし）った。

だが、まだ彼は体を離したくなかった。

彼のものも衰えてはいない。

女はこの時、ぬめった感触に、また違った触れ合いの感覚を持った。痛ささえあつた激しい体のぶつかり合いから、いまはやさしさの一体感に変っていた。

それにつれて、男の肩先に喰い入っていた指の爪が、掛かりの強さを失なつて、だらりと熊笹の上に落ちた。

続けて、二度、三度と、彼は放った。

激しく絡み合った。

ぐっしよりと二人とも汗を掻いていた。はじめて、そのことに気付いたように、彼は女の唇を吸った。

その時、女は、恥しそうに笑った。

行為が終つても二人はいつまでも体を離さなかつた。二人の汗が胸のところにあたまり、女の胸の谷間で汗が光った。

「待つでろ」

彼は日本手拭をもう一度、水溜りにつけて、固く絞った。女の乳房のあたりをていねいに拭きとつてやる。

首筋にも汗は滲んでいた。三度も、手拭を水に浸した。最後は、脚を開かせ、白い内腿から、女のその部分まできれいに拭いてやった。

「恥しいでねえの」と女と言ひ、いやいやをした。やつと、二人で身の上話をする。

女の名は友部ヤスエと言った。

この下の村落のもので夫は出征中、夫の老父母と一緒に暮らしていると言った。

男とは二年以上も接していない体だった。齡は二十五歳だった。最後に女は泣いた。夫にもすまないし、夫の両親に見つかったら、この村にも居られなくなると言った。彼は自分のことを、タコ部屋から逃げ出して二年になる男だと言った。

手首の傷を見せた。

女は彼に同情してくれた。

「おらだち、男と女の仲になったんだべ。いざとなおどけえれば、おらが連れで逃げでやる。お前の夫が帰ってくるまででいいはでなっ。おたげえ、淋しいもの同士でねが。おら、毎日でも会いたばってそうもいがねえんだ。五日後にこの場所で待つでる。来てくれねば、おらがおめえの家サ、訪ねで行ぐでなっ」

最後は脅しのことばになった。白岩由吉と友部ヤスエはこうして、男と女の仲を深めて行く機縁を得たのであった。



「おらの命ごとたすげでけだ人の骨だ。粗末にはできね」

彼の洞窟に二度目の逢瀬の時、ヤスエを招き入れた。錠で岩の面を平らに削り取り、その上に、吉峯老人の骨片をおいた。命の恩人の話をしてやったらヤスエは「あんたも苦勞したんだねえ」と言った。

ヤスエと彼はよく境遇が似ていた。

岩手から開拓農民として入植したヤスエの一家は、寒気と痩せた土地に阻まれ、極貧生活をした。

七歳で父親を亡くし、やはり一家離散の浮き目になった。母親とも十歳の時に死別した。遠い親戚筋の、常呂の商家にもらわれ、縁あつてこの知来の奥地に点在する農家に二十一歳で嫁に来た。

二年の結婚生活で夫は、北満の地に連れて行かれた。齡は違つたが、姉の真佐江とよく似た境遇だった。

姉の嫁ぎ先は秋田、悪名ばかりを高めてある自分のことを、どう考えているだろうかと思ふと申し訳なさが先に立った。

この時、白岩由吉は三十九歳、もう不惑の年に届こうかという年齢であつた。

姉と別れてからすでに二十年余の年月が経過している。

ヤスエの心は微妙に揺れ動いた。

二人が体を合わせ、こころを一つにして

いる時は、好き合った男と女になるのに、体を離すとヤスエは自分を責めて泪ぐんだりした。努めて明るく振舞うこともあったが、そんな時はかえって痛々しさが眼に付いた。それなのに言われたとおりに、彼に抱かれるためにヤスエは山間を分けて逢いに来た。彼が話す、小さい時の話や、蟹工船、タコ部屋の怖ろしさに、わたしなんか苦労したうちには入らないね」とヤスエは彼の話には耳を傾けてくれた。

結局は、離れられない男と女の仲になつて行つた。真暗闇の岩穴で一人寝ている時、ヤスエがそばにいてくれたらなと彼はいつも考えた。

妊娠中毒症で新婚一年半ほどでこの世を去つたふじ子のことを急に思い出したりもした。女とは縁も薄く、家族運もいつも悪い。自分の半生のことが思われた。

ヤスエとも束の間のことかも知れないと思うと、抱く時はその思いの分だけ激しくなつた。その激しさに、ヤスエは、はじめて白岩由吉によつて、女の歓びを授けられた。男の肌が恋くなる―そんな気もそぞろの日が続くこともあつた。

ある日、佐呂間別川に遡上してくる鮭を採るために、彼は、一人で計露岳の山裾野にまで足を伸ばした。食糧の確保もあつたが、新鮮な鮭をヤスエの口に入れさせてやりたいという思いもあつた。

佐呂間別川の清流は岩を噛む激しい水の流れを持っていた。河口から遡上してくる

鮭の大群は、このあたりでは熊たちの狩場となる。危険な場所でもあった。

彼は清流に分け入り、銀鱗をきらめかす鮭を素手のままで何匹か捕まえた。

土工人夫をしていた時にも秋になると、あきあじ漁 鮭漁は楽しんだ。何匹か陸に揚げた時、一匹の熊が、草叢の向うで動いたのを彼は感じとった。

「熊が出るからあのあたりは一人歩きは危ない」ヤスエにはそう言われていた。

地元の人間は近寄らない場所であった。川の中にいることのほうが危険だった。早々に立去るのが賢明な策であった。

それで、彼は川岸の岩場に立ち戻った。草叢の向うで、熊がのそりと動いた。

川岸とは、まだ、三十メートルほども離れていた。彼は鮭を岩場に残したまま、雑木林に逃げ込んだ。度胸を決め、ゆっくりと歩いた。熊には餌場を譲った。鋭い爪で五体を引き裂かれるに違いなかった。

熊は鮭の漁場に向かった。川には魚群が群れていた。

この時は人間などという得体の知れない生きものには熊は関心を示さなかった。

が、熊から一步でも遠ざかろうと考えた彼は不覚にも岩山の崖から足を踏み外し、下に落ちた。やはり、熊に出会ったことで、気もそぞろになっていたのである。そのまま気を失ってしまった。

目覚めたとき、あたりは漆黒の闇になっていた。立上ろうとしたが、体中がずきず

きと痛んだ。腰を強打したらしく、ぎっくり腰のような症状になっていた。

「ああ、このあたりはいま熊が出没する地帯だ」

そう考え付くともう生きた心地がしなかった。二日、同じ場所にじっとしていた。熊とは遭遇しなかった。這うようにしてすみ、岩陰に身をもたせたままのまじり喰わずでじっとしていた。

二日目の夜、恐ろしい鳴き声を耳にした。ボオツ、ボワツ、ウオーボボウ……低くこもった声で、静まり返った中に、何か、神の声を思わせる響きがあった。

獣なのか、鳥なのか、彼には想像もつかない。彼は、仏法僧の声に似た何者かの鳴き声を耳近くに聞いていた。

ぱたぱたと闇の夜を駆けるものの羽音がした。怪鳥は飛びたつたように思われた。

彼は腹を空かせたまま、いつの間にか寝入ってしまった。と、夜半、また耳近くであの、ボボボウ、ヴァオー……と鳴くものの声を聞いた。

おそるおそる闇の向うに視線を投げると、暗い樹上あたりに、らんらんと光る双つの眼があった。月の光を写してか、黄褐色の眼は妖しい光を放っていた。怪鳥の眼だった。シマフクロウに違いない。と彼は眼の光を見たとき思った。

シマフクロウはふくろうの中の最大種で、魚を生食とするのでウオミミズク属とされる。シマフクロウは羽を広げると、優に

ニメートルの大ききさになるといわれている。彼にシマフクロウについての知識があったわけではないが、いちばん大きなふくろうが北海道にいて、その名をシマフクロウという話までは知っていた。

朝が明けた時、彼はこのシマフクロウに一匹の鮭を恵まれた。声のした樹のあたりににじり寄ってみたら、食いかけの鮭が一匹、草叢に落ちていた。

彼は鮭の生肉を貧り喰った。

彼はシマフクロウの姿は見なかったが、このアイヌシモリの間では神の使いだとされるシマフクロウによって飢えをしのごとができたのだった。

やつと五日目になって少し歩くことができた。山ぶどうの群落を見つけた。

腹一杯、熟れた実を食べた。

腰の痛む部分にギプスを嵌めたつもりで、彼は、山葛でしっかりと自分の腰を縛りつけた。一本の杖をつき、足を引きずりながら、知来の洞窟を目指した。

秋あじと共に、急に山の気温も下る。

夜は寒さにも耐えた。一週間かかって彼は知来の洞窟にもどった。

心配して毎日のようにヤスエは通って来ていた。無理が祟り、高熱が出た。ヤスエは熱さましの薬まで持ってきてくれ、彼のことを看病してくれた。男と女の情はこの時を契機により深いものとなった。頑健な彼の体はすぐに回復を示した。ヤスエのやさしさがなによりも彼には嬉しかった。

北国の秋は足早に過ぎて行った。夏半ば、群青の山間をついこの前まで見ていたのに、ナナカマドが紅葉し、黄褐色の実をつけたと思つたらもう秋は深まっていた。

すぐに冬が訪れる。まだナナカマドの樹は少しばかりの実をつけているのに、山一面が雪の白さに変容した。

冬眠の熊のように穴にもぐり込んだ。

大きな岩を扉代りにした。

彼は雪の中に閉じ込められた。時折りは穴を出たが、それはヤスエに会いに行くときだけだった。これまでは山菜とりや、焚木集めにヤスエは山に入ってきたが、いまは家を出る理由がヤスエにはなかった。

人里に出ることは危険だったが、単調な日が続くほど、欲望の火は燃え盛った。

夜中に、ヤスエの家の離れの藁打ち小屋に忍び入った。筵（むしろ）や吠（かます）、藁の雪靴などを作る小屋だった。

鉱業所も近くにあることから、農家の副収入になるのであった。ヤスエは夜なべして藁打ちの仕事をしていた。

老父母と一緒にすることもあるから、思いを果すことができないこともあった。

ヤスエは藁打ち小屋に一人でいる時は、木杭の棒を裏の溝のあたりにおき、彼を引き入れる時のしるしにした。アンカの火が一つあるだけの寒い部屋だった。

藁束を背に二人は束の間の情事に耽った。が、十日に一度会えればいいほうだった。地吹雪が荒れ狂うと一歩も外には出れな

くなつた。そんな時は、彼は、雪の中を一人、山にもどつた。

白岩由吉は一冬をこの知来の岩穴で過ごした。網走刑務所での非人間的な扱いから解放されただけでもここは天国だった

「お父（ど）ちゃ、シヨツペイ河渡つて、おらが竜飛崎までお父ちゃを連れでいっでやるがらな。お父（ど）ちゃがおらの守り神だべさ」

仏壇に手を合わせるつもりで、朝晩、彼は岩棚の上の吉峯勇蔵の小さな骨片に手を合わせた。昭和二十年の年を迎えた。

小さな餅を二つ、ヤス工から貰つた。彼とヤスエは二人で正月を祝つた。

手の傷口もやつと治つた。

だが、半円形の傷跡は、はつきりと手首に残つた。逃げてから五カ月目を迎えようとしているのに、手枷、足枷がまだ嵌められている感じが残つていた。

時折り、夢を見る。重い鉄塊が胸の上のつているのだった。あお向けになつて寝るといつも手枷が胸の上にあつた。その重さの感覚が呼び醒まされるのである。

雪晴れの日は、ちよつとした猟にも出た。エゾリスに野兎、北狐、遠い山裾野の白い世界に時折りはエゾ鹿の姿なども見かけた。小動物を仕掛け罠で獲つた。

針金の首輪をニメートルほどの高さの低木の先に吊るし、餌になるものを針金の輪の先に一緒に吊るす。

食物を口にした時、獲物は針金の輪に首を通すので、餌に食い付いた途端に木のばねがはね、獲物は宙帝りになる仕掛けだった。罨にはよく野兎などが掛かった。

やがて春の便りが届いた。

川の水量が増した。雪が解け始めていた。川原に降りると、ふきのとうが雪を分け、芽を吹いていた。

一冬、雪のために不便な思いをした二人だったが、いまは会う機会が多くなった。ヤスエは、山菜とりにかこつけて、山の岩穴にやってきた。

ヤスエのために、彼が山菜を摘んだ。そうやって二人だけの時間を彼は作った。

だれに気兼ねすることなく、二人は生れたままの姿で体を合わせた。

ヤスエの喘ぎの声も明らかに変わった。

われを忘れるようになった。

男と女の情が深まった。だが、二人にとって運命の日がきた。

一通の戦死公報が、ヤスエのもとに届けられた。北満の地でヤスエの夫は、二十七歳の若さで、この世を去ったのであった。

約束した日に岩穴に来ないので、彼は待ち切れず里の近くまで降りた。

名の記された骨箱が還ってきた。

白い布に包まれ、白いタスキを掛けた軍服姿の在郷軍人会の男が列の先頭に立っていた。彼は草叢に身を隠していたが、老父母と共に歩むヤスエを見て、この葬列がだれの者であるかを知った。



「おらは厄病神なのかも知れない。」  
そんなことを彼は考えた。  
だが別の思いもあった。ヤスエが自分だけのものになった―眼の前を通過する葬列のことは、白岩由吉はもう忘れていた。

5

「おねがいだから別れてくれえ」

夫のかたちばかりの葬いをすませたあと、ヤスエは、岩穴に姿を見せた。

げっそりとやつれていた。

覚悟のことばを口にした。

泪顔のヤスエの肩を、彼は強く引き寄せた。優しい男の顔になっていた。

「罰が当たったんだア。悪いことしていた女に神様が罰を与えたんだア。あのひとに顔向けできねえ、こんげなことになったも、よぐねえことをしたからだア。もう死にてえ気持だア……」

ヤスエは彼に抱きとられたまま、泣いた。が、彼の手は、ヤスエの胸懐に入り、裸の丸いかたちを掴みとっていた。その手をヤスエは上衣の上から押さえつけた。

頬を伝わった泪を彼はやさしく指で拭きとってやった。

「おらという男がいるでねがア」

「道誤まった男と女だア、どうしようもねえ」

ヤスエは抗（あがな）いを見せたが、結局は、彼に膝を割られていた。下着を降ろ

される時はもうじつとしていた。

愛撫もそこそこに、彼は体を合わせた。いつときでも哀しさと罪深さを忘れない、そんなひたむきさをヤスエも示した。

肩先にヤスエの爪先が立つ。

彼は何条かの引っ掻き傷を作られていた。痛かったが、もう身は引き裂かれてもいと思つた。ヤスエとの愛のひとときがすぎた。

「こんな女子（おなご）ですが、わたしを連れて行って下さい。もう家にも帰れません」

ヤスエがすがるような眼をして、言った。目の端から涙が一筋すーと流れた。

「おらど一緒に逃げるだが」

「一緒に死にます。ほんとはここに来る前に納屋で首くくって死のうと思つたども、勇気がなかった。ほんとはあんたに殺されたいと思つて、ここへ」

「わがった。ひどどごろにずっといる気はねえ、おらも吉峯のお父ちやの骨を預つてる身だなあ。一度死んだ二人だと思えば、もう、なんも恐いものはねえだ。おらがおめえを……」

ほんとうは幸せにしてやると言うところだった。だが、脱獄囚であることには変りはない。ヤスエを不幸に追い込む厄病神が自分の正体なのかも知れなかった。

季節はこれから本格的な春になるところだった。どこまでも歩が伸ばせる気候である。彼は低い山陵地帯の尾根伝いにひとま

ず、遠軽（えんがる）に出、北海道中央部を抜けて旭川、砂川、札幌に出るコースを考えた。ほんとうは、人目を避けるためには大雪山系に分け入り、ひっそりと暮らしていたかったが、彼には、吉峯老人に誓ったふるさとに骨を持って帰ってやると言った約束があった。

吠（かます）で背負い子の籠のようなものを作り、食糧の米や、寒乾せの乾肉などを持ち、ヤスエをつれて、彼は知来の洞窟をあとにした。

身寄りのないもの同士、二人は夫婦の慰わりを見せながら、まだ雪の深い山を分けて網走の山間部を西へとすすんだ。

女連れなので、遠軽に出るのに三日かかった。石北線が、遠軽からは旭川まで出ている。昭和七年に全線開通していた。

現金は、隠し筒の中にあった二十円の他に、いくらか用意していた。女連れなので怪しまれることはないと思った。

戦時中のことで指名手配の写真が駅頭などにも貼られているわけではない。

だが、用心して彼は上川の手前の天幕という小さな駅で降りた。

ヤスエには、旭川あたりの工事現場から逃げたことがあるので、そちらには足を踏み込みたくないと言った。

終始、ヤスエは元気がなかった。

なにか死出の旅に同行しているような鬱（ふさ）ぎようだった。

天幕の駅を降り立ち、二人はまだ雪の残

る大雪山系に入る。石狩川の源流に近いあたりを越えた。雪も深く、水も冷めたい。

だが、例年の春より、この年の春は訪れが早かった。オホーツク海に吹いた南風も四月のはじめ、半月は季節は春の気配を早めていた。

層雲峡沿いの山に入った時、思わぬことが起きた。

足が遅いのでヤスエを待っていたが余り遅いので引き返したら、まだ雪の残る崖つ淵にヤスエは一人立っていた。

直感的に、ヤスエは死ぬ気だ。と、彼は思った。

彼が戻って来た気配を待っていたように、ヤスエの体は崩れるようにして火山岩のそそり立つ岩壁の下にと落ちて行った。

自ら、身を投げた。

素早く彼は行動を起していたが、十数メートル先の崖の突端に、危ういかたちでヤスエの体は止どまっていた。

やっと岩を伝い、その場に降りたが、ヤスエは完全に気を失なっていた。

岩にぶつかっただのか、顔の半面と、腕、腰などから血が滲み出していた。

急な崖をそれでも彼はヤスエを背負って、崖上に出た。ためらいながら身を投げたゆえか、幸いなことに、命にかかわる深い傷は負っていないかった。

あやうい、死の同行記、だつと言える。

炭焼小屋を見つけ、傷だらけのヤスエの体を横たえた。小さな囲炉裏のある土間と

、三畳ほどの大きさの板の間、それでも怪我人を横たえるには充分の広さだった。

彼は自分の手首の傷を治してくれた。雪の下を、雪を払い探し求めた。

ヤスエの傷口に液汁を絞り、塗りつけた。右の足首の腱が切れているらしく痛がった。歩行出来るまでには時間が、かかりそうだった。

結局、北大雪の低い山陵地帯で、本格的な春を迎えた。大雪山系の二千メートル級の山の頂遥かに望める地帯であった。

頂は白い冠雪をかぶっている。

やっとヤスエは、彼と一緒に生きる決意をしてくれた。つきつきりで看病してくれた男の情にほだされた。

なにか、巖（いか）つい男のようにヤスエには思えていたが、白岩由吉はやさしい気持を持っていた。

それに、とても無邪気なところがあって、姉から教えられたという、ねぶたの夏祭りの、ラッセー、ラッセ、ラッセーラッの掛声を、彼女を元気づける時には口にした。りした。そんなとき、ヤスエは笑顔を見せることもあった。

「歩げるえんたになったらシヨツペイ河渡つて二人で内地さ行くべ。おら、東京さもいだごとあるし、まるっきりの田舎もんでもねえのさ」

ある日、彼はヤスエに告げた。

「ほんとに好きになったんだあ。わたし、あんたのことばかり考えてる」

控え目なヤスエなのに、熱っぽい口調で、このときは応じた。女の歓びの表わし方も、この頃はもう遠慮のないものになっていた。

四月も半ばのある日のことだった。

彼はヤスエを小屋に残し、食糧を手に入れるために里地に降りた。往復五時間ほどの距離である。上川町まで買い物に出、戻ってみると、小屋が荒らされていた。

一眼で、それが熊の仕業であることがわかった。他ならぬ荒れ様であった。

強い力で、木の扉は叩き潰されていた。

「あつ」と白岩は息をのんだ。

むごたらしい血の跡が飛び散っていた。

「おい、ヤスエ、どこだべ」

そう呼んだが、あたりには、ヤスエの姿はなかった。熊の奴に襲われたのか？

それしか考えようのない始末だった。

彼は鉞（なた）を手に、打ち壊された裏口への道を取った。

ヤスエの体が引きづらて行ったのか、草地と、もう半ば溶けた雪の上に、点々と血の跡があった。

「ヤスエ、ヤスエ！」

空しい叫びを、彼は上げ続けた。

近くに熊がいるはずだった。

もう、彼は対決覚悟の気持でいた。

だが、ヤスエの声はどこからも返って来なかった。沢地を下った地点で、朱に染まったヤスエの死体を見つけた。

鋭い爪で引き裂かれ、着衣が血の色に塗り変えられていた。内臓のあたりが扶りとられいた。ヤスエは息絶えていた。

「畜生！おらが悪がったア、ヤスエ、勘忍してけエ、おらが仇討つてやるはでな」

彼はヤスエの死体にとり縋り、声を上げて泣いた。やがて泪も噎（か）れた。

こうなったら何日でも、熊の奴が戻って来るまで待つてやる！そう決意した。

木の先を槍のように尖らし、風下の草叢に身を潜ませた。

一晩待ったが熊は姿を現わさなかった。

熊狩りをしたことのある土工人夫から聞いた話を、彼は思い出した。風の動きを知る方法だった。指に唾をつけ、頭上に高くかかげた。風上に当る部分の指は冷たく感じる―そのとおりのことをした。

木に登り、熊を誘った上で、熊の爪を切り落す―

少年の頃、八甲田山の山中で会ったマタギの男の話も、彼の頭の中にはあった。

やる気だった。

二日目の夕刻、彼は熊の足音を近くで聞いた。ヤスエの無残に喰い荒らされた死体を囿（おとり）にして待つ気持はとても辛かった。熊は自分の仕止めた獲物のある場所に必ずやってくる。

そう考えた上での作戦であった。

熊の足音を耳にした時、体が震えた。

恐さではない。

彼はヤスエを襲った熊と差し違えて死んでもいいと思っていた。勇み立ったのだ。

沢地に一頭の熊が下りて行った。

その気配だけがわかった。

風上に立たぬよう用心しながら、熊は沢地を目指す。

もう、ヤスエの死体に手を触れさせることはさせない。そう、決意していた。

周到に作戦は練っていた。草地を踏みしめ、白岩は全速力で走った。沢地に下る手前で、熊の横手に出た。

手には手製の木槍を持っていた。

櫓（やぐら）材の若木で作った。先は鋭い。一頭のヒグマが立上った。

「うぐわーっ」

と、臓腑に染み込む獣の叫びをあげた。

体長は二メートル近い。巨大な獣である。はじめから戦いを挑む姿勢で対した。

襲って来る前に、木槍を腰にためた男が、直突の姿勢でつさすすんでいた。

木槍の先がヒグマの腹部に突き立った。

太い腕で木槍を払われたらひとたまりもない

。それで、一度、木槍の先を突き上げてみせ、擬態の動作を見せてから、二段構え姿勢で、腹部を狙った。ぐさりと刺さった。

次にはぱきつと音がし、払われた木槍は真二つに折れていた。

あとは逃げるしかない。

すべて頭の中で緻密（ちみつ）な作戦を練っていた。予め、恰好の樹を見つけておいた。一目散に走り、彼は、傍らの櫓（なら）



の樹によじ登った。足場のいい枝振りを持つた樹であった。三つ又に分れた場所で熊が逆襲してくるのを待った。手負いの熊は兇暴な獣になっていた。

「ぐわーっ」と、樹木を揺るがすような咆哮を発し、熊は樹の幹を揺すり立てると、鋭い爪を木肌に喰い込ませた。

巨大な口が開かれている。

鋭い牙に、尖った歯先、赤い口はすでに血の色をしていた。熊の執念深さはよく知られていることだった。特に手負いになれば相手を倒すまでつけ狙うといわれている。

彼はもう度胸が据っていた。

熊は片手で体重を支えながら、利き腕をふるって、樹上の彼を叩き落そうとするに違いなかった。

「ふわっふわっふわっ」荒い鼻息だった。

相手を威嚇するためか「ぐわおっ」と腹の底からの怒りの声を発した。

完全に樹上で対峙する恰好となった。

いまが、生か死の別れ目だった。

右手に鉋を持ち、彼は熊が至近距離に登ってくるのを待った。

恐ろしいひとときだった。

熊の片手が、彼の足下の樹の幹に掛かるのを待った。五本の指の爪が木肌に喰い込むその一瞬を待ったのであった。

「今だ！」

腕が先に伸び、足下五十センチほどの幹に熊の爪が揃った。次の動作を起す前に、彼は、静止した五本の爪の付根あたりに鉋

の刃先を振りおろした。

ざくつと、木肌にまで、渾身（こんしん）の力を込めた刃先が喰い込んでいた。

何本かの熊の指が切断されていた。

支えを失なった熊はのけぞり、そのまま、大きな音を立てて、地上に落ちた。

彼は「うおっ！」とあらん限りの声をふり絞った。彼の威嚇の声に熊は逃げ出した。

それでも小一時間ほど彼は樹上にいた。

熊の復讐を怖れた。

樹下の向うには、無残な殺され方をしたヤスエの朱に染まった着衣が見えていた。

どうやら、熊はおそれをなして逃げたらしい。やつと薄暮時、彼は樹から降りた。

ヤスエを葬ってやるために崖のあるあたりに小さな横穴を見つけた。

ヤスエの死体を横たえ、大小の岩を、その横穴に詰めた。赤桃色の花を咲かせたオサクラソウの群落を近くで見つけた。

根株をいくつか、ヤスエを葬むった横穴のつき出た台場のあたりに移し変えた。

「おらが殺したようなものだべ」

男泣きに肩をふるわせて彼は泣いた。

「どうしようもない悪い星の下に生れた、やはりおれは厄病神の男なのだ」

ヤスエに詫びることばはなかった。

ただ、おのれの幸薄い人生を恨むしか彼には自分を納得させる方法はなかった。

山を下った白岩由吉は大胆になった。旭川の町に出た。一人の脱獄囚を追う者の姿はどこにもなかった。

昭和二十年五月と云えば、戦争末期の、日本の敗色濃い頃のことであった。

ソ連参戦の動きもあり、北の守りの必要性があらためて見直されていた。B29の無差別爆撃がはじまり、以後全国の各都市に戦禍は及んで行った。

硫黄島の玉砕が三月十七日であった。

すでに北海道の内湾部では機雷が投棄されており、昭和十七年一月の時点で、松前近辺の漁船が、機雷の爆発で暁の夢を破られ、陸地にあるのに約半数の百四十六戸の窓ガラスや板戸が、爆風により被害を受けたりした。

その後も同様の事故が沿岸各地で起った。白岩由吉は旭川から汽車の切符を買い求めた。札幌に出、さらに、青函連絡船に乗るべく、函館の街に彼は二十年ぶりに舞い戻った。ひと頃の活気はなく、函館はさびれた街になっていた。

青函連絡船は軍物資の輸送が主業務となり、特別の理由がない限り民間人の乗船は許可されない状況にあった。

青函航路は軍需物資、兵員輸送のために、最盛時二十一運航あったものが、白岩由吉が岸壁に立った頃は十三運航にまで減らされていた。燃料石炭の粗悪さ、戦時標準型の粗製濫造船だったため、機関故障が続出したのであった。

白岩由吉はどうしても吉峯老人の骨を竜飛崎のふるさとまで届けてやりたかった。海に見える場所に、ハマナスの花株でも植え、その下に、吉峯老人の骨を埋めてやろうと考えていた。

これは彼自身が獄中にあつた時から、心に誓つたことである。

思いを果すためには、津軽海峡を船で渡らねばならなかつた。

だが、ソ連参戦の噂が流れていたのも、北の守りのために兵糧の輸送がいまは優先的に行われていた。

函館港の岸壁に立ち、津軽海峡を眼の前に、毎日、彼は無念の涙をのんだ。

停泊中の船に辿り着く方法はないかと、彼は突飛なことを考えた。

夜陰に紛れ、船に近づく方法を探つた。

港の片隅には、こわれた小舟が打ち捨てられていた。実際に、ある夜のこと、彼は暗い闇の中を一隻の手漕ぎの小舟を操り沖合いまで出た。

船の真下まで漕ぎついた。

が、考えていたより甲板に上るまでの鉄の壁は高かつた。足掛りになるものもない無風状態の中に船は停泊しているかに見えるが、碇の鉄鎖は、それでも大きく揺れていた。船体ごと、大きく揺すられいる。綱渡りの行は断念した。

捨てられたままの鯁漁のための小さな番屋が、いくつか残っていた。そのうちの一つに彼は潜り込み、時機を待った。

昭和二十年七月十四日の明方、函館市内に敵機来襲の空襲警報が鳴り響いた。

はじめて、戦争というものを眼の前で見た。白々と空が明けた。

快晴の一日を告げていた。

米軍機動部隊は、艦載機三百機、大型機二十機を、この日、函館、長万部、室蘭、苫小牧、浦河、帯広、池田、根室の都市攻撃のためにより向けた。

七月十四日の第一次空襲は午前四時五十六分から十一時三十分、そして第二次空襲が午後一時五十五分より四時十七分まで続いた。

この空襲で青函連絡船は翔鳳丸、飛鷲丸、第二青函丸が青森港外で沈没し、松前丸が函館港外七重浜で坐礁炎上し、津軽丸が道南狐越岬沖で沈没の被害を受けた。

さらに第三青函丸が道南福島沖、第四青函丸が函館港外葛登支（かつとし）沖、第六青函丸が青森湾野内沖、第十青函丸が函館港外で沈没、第七、第八青函丸は函館港内で損傷坐礁した。

翌十五日には第二波攻撃があり、艦載機の数も四百八十機に増え、前日の空襲の被害を免れ、湾内にいた最後の一隻、第一青函丸が、津軽半島三厩沖で沈没した。

この時は室蘭附近の海上には戦艦三隻、巡洋艦一隻、駆逐艦十隻が沿岸に一斉に艦砲射撃まで加えた。

白岩由吉は、番小屋の破れた窓から、丸っこい体をしたグラマン機の黒い機影を

ただ半ば感じ入って眺めていた。

それは一方的な戦争ごっここの図であった。青函連絡船は内地との連絡路をこの二回の空爆で完全に断たれた。吉峯老人の骨を竜飛崎まで運ぶどころの話ではなかった。

無残に荒らされ、沖合いで炎上し黒い煙を上げている連絡船を見て、彼は津軽海峡を渡ることを断念した。

函館を去り、松前線の切符を手に入れ、竜飛崎に一番近い、松前を目指した。

松前の二つ手前の渡島（おしま）の駅に降り立つ。竜飛崎とはいちばん近いと言われる白神岬に向かった。

駅前から七、八キロの距離であった。

白神岬に立つと津軽半島がもう眼の前にあるように見えた。夏空の澄んだ青さには一片の雲もなかった。

南の方角には下北半島も望むことができた。自分が生れた外ヶ浜の三厩（みんまや）のあたりも遠くに見えていた。

なにより、千姿万能の岩礁を持つ、竜飛崎が眼の前にあるという感慨に打たれた。

対岸までほんのひとまたぎ、そんな思いにさえ、彼は捉われた。

沖合いは東西の海流が合流する地点とも一言われており、彼の眼にも二筋の潮の流れがはつきりと視認できた。

「お父（ど）ちゃ、ほれっ、竜飛崎はもう眼と鼻の先だべ。潮の流れさ乗ってせめでお父ちやのふるさどサ、辿り着いでけ。なあ、網走川よりだば、よっぼどこの白神岬

の方が近いべな」

海辺で一艘の破船を見つけた。彼は骨箱におさめた吉峯老人の骨を、この一艘の古びた漁船に預けた。

ざつぷざつぷと波に洗われながら、彼のところを託した木舟は沖へ沖へと持ち去られて行つた。

いつまでも立ちつくしている、やがて水平線上に赤い夕焼け雲が現われた。

遙か彼方の津軽半島の島影も赤く染めはじめられていた。

「お父ちや、今度会う時は、あの世だべ」  
そんな独り言をまた呟やいていた。

もう沖合い遙か、小舟は小さな小さな点になっていた。やがて、逆光の眩しさの中に、一艘の小舟は消えて行つた。

5

物資が不足している時代のことだった。戦争の生々しさを眼にしたことで、また彼は一人、山にこもることを考えた。

旭川から、徒歩で美瑛（びえい）の村に入った。西北に大雪山系の二千メートル級の高い山々、そして美瑛川沿いに山を指せば十勝岳の噴煙を望むことができた。

十勝岳、美瑛、富良野岳、上ホロカッタ山、下ホロカッタ山、旭岳、前富良野岳と、火山地帯の山々は重畳（じゆうじょう）とした山裾野を視野の向うに広げている。美瑛の村をすぎて十勝岳を目指す。

火山礫（かざんれき）が多く、わら草履の足にはこたえた。その頃はまだ観光化もすすんでいないから美瑛の駅は寒村の小駅という印象であった。

もちろん、警察の管外で、事件でも起きない限り、このあたりに巡査が現われることはない。

結局、白岩由吉は、昭和二十年八月十五日の敗戦も知らずに、十勝岳の麓で、昭和二十一年の四月の雪解けの日まで一人で山中で暮らした。

営林署の造材小屋を彼は棲家にした。

二段ベッド式で板敷きの一階の居間風の造りの場所にはちゃんと囲炉裏も切っていた。味噌、醤油、米麦、魚の干物、梅干し、塩マス、切干し大根、昆布、わかめまで揃っている。

夏の間だけの造材小屋だったが、彼は、営林署の地元の男と話を通じ、造材人夫に雇ってもらった。「旭川の工事現場で、あまりの仕打ちに、現場監督の男を殺してしまった」それで逃げている身だと伝えた。

かえって同情された。

火口近い水は硫黄分を含んでいてポンピリと呼ばれており毒水であることも教えられた。この地の男たちは彼には親切だった。

雇われたのは戦時中のことだったので、門材も軍の調達品、一人でも人手が欲しい時期のことで、彼は雇われ人となった。一

それに彼は人の二倍も黙々として働らいたから、すぐに信用された。



トドの木に唐松、伐採に造材作業、彼の体力をもってすれば苦にならない仕事だった。

別の場所で囚人たちによる伐採現場もた。いわゆるタコ部屋の信用人夫の頭の下に預けられていて、青衣、赤衣が囚人、普段着を着ているのが信用人夫だった。

造材小屋は冬になると道も閉ざされるので閉じられることになったが、彼は番人代りに一人この小屋に残ることになった。よく働らいたので、いくらかの貯えもあった。

一冬中、彼は、柁（まさ）の樹を切り揃えたものを鉋一つで、マサ打ちをした。

屋根を葺く時に使う素材で、薄い柁目の板を小屋の外に積み上げておくほどの量を一冬かけて作った。

これも春になって、売るといい金になった。マサ屋さんと呼ばれて、このマサ打ちでめしを食っている人もいる時代のことである。

この十勝の山中に入ったのにはもう一つ、目的があった。

一度受けた屈辱や、哀しみのことは生涯忘れないのが彼の持って生れた性格であった。

悲惨な死を遂げたヤスエのことを忘れていたわけではない。

大雪山系の山々には熊がうようよいる。前から耳にしていたことであった。

ヤスエを襲った熊には一応の報復は遂げたが、まだ、彼の気持はおさまってはいなかった。

造材小屋に冬籠りする気になったのも、熊をわが手で何頭か討ちとってみたいという思いがあったからであった。

地元の猟師たちは、秋口、つと呼ばれる藁苞（わらづと）爆弾を用意する。

焼砂にダイナマイト、炭の粉、硫黄の粉をまぜ、湿気ないように薄い皮に包む。

熊の通る道の木の枝に、鳥肉などをくつつけて吊るす。

噛み付くと同時に熊の顎が吹っ飛ぶ仕掛けだった。実際に、彼は、顎を吹っ飛ばされた熊を見たこともある。

一冬越し、彼はじつと春を待った。

マサ打ちの合間に、風雪のおさまっている日には、冬眠をしている熊の穴を見つけたために、白い原野を歩いた。

地元の猟師に、冬眠中の熊の穴の見分け方を教えてもらった。いくら深い雪をかぶっていても、地中の熊の体温が地表に発散されるので、雪の面が、そこだけへこんでいるという。時には、ゆらゆらと湯気が立ち昇っていることもあると猟師は彼に教えてくれた。

アマツポという熊取りの仕掛けも習った。彼は三つの熊の穴を見つけた。針葉樹の枝を払い、先を尖らせた丸太を何本も用意した。

春先き、お彼岸の頃には熊は穴から出てくると言われている。その時期を狙った。

その前に、一つの穴に七、八本の木矢を円型に打ち込んだ。地上に出ている木矢の部分束ねた。アマツポの仕掛けだった。

あくまで一人で闘うつもりだった。

冬眠から覚めた熊には体力がないし、攻撃本能も殆んどないと聞いていた。

一冬かかって特製の槍を作った。棒トウギリと呼ばれる螺旋状（らせんじょう）のねじり部分が先端についた錐（きり）を槍の先に仕込んだ。

狩りの日が来た。

雪はまだ深かったが、目当ての熊の穴に思う様、深く、槍を突き立てた。

一突き、二突き、手応えがあった。

棒トウギリを構え、熊の出てくるところを待った。傷つき、血だらけになった熊が、雪の穴から地上に姿を現わす。

眠気を覚まされ、熊はまだ朦朧（もうろう）としている。その上、穴の上に組まれたアマツポの仕掛けだった。出てくる時にも体を傷つけることになるのだった。

熊は何が起きたかまだ判らずにいた。

彼は立上ろうとする熊の心臓に、錐の先を突き立てた。鮮血が飛び散り、雪を染めた。アマツポの仕掛けを熊は手で払いのけた。彼に対して闘う姿勢を見せた。

彼は減多やたらに木槍で突いた。

まだ痩せた若熊だった。

体長も一メートル半ほどしかない。

彼の足元に突進してきたが、すでに力を失なっていた。どうと前倒しに倒れた。

「ヤスエ、おらはおめえの仇をとってるぞ」そう、ヤスエに言い聞かす。

ある時は、取り逃がした小塚看守の鬼の顔にもなった。蟹工船に同乗した巡査や、大河原監督の顔にもなり、彼にヤキを入れたタコ部屋の棒頭の顔にもなった。

大きな熊も仕止めた。優にニメートルはあった。当面の敵を熊に見立てた。

白岩由吉は鮮血にまみれ、阿修羅の表情のままに、ひとり、熊狩りをした。

一匹仕止めるたびに「うおーっ」と獣のような快哉の声をあげた。

三匹の熊を血祭りにあげた。

春になったある日、白岩由吉はふいに、裏大雪の山懐から消えた。

ヤスエの仇を少しでも討つことができた。それは、ヤスエに対する愛の証しの気持をあらわしたものだつた。

どこか野獣じみていたが、力に対しては力でしか、白岩由吉は立ち向かえなかつたのである。